余は如何にして社会学教師となりしか

――学生諸君の質問に答えて（続）

加藤秀一

昨年、三名の先生方（橋本茂先生、吉原功先生、橋本敏雄先生）が定年を迎え退任されるにあたって、私は直接に先生方に宛てた言葉ではなく、学生諸君に向けてふだん話す機会のない自分の知的遍歴の一端を贈ることにした。それが幾人かの学生諸君にとって何かの役に立つとすれば、そのような作業を通じて、なによりも第一義的に教育の場である大学においていくばくかの経験を共有させていただいた先生方に対する感謝の意を間接的にではあれ証することになると信じたからである。それからなお一年も経たぬ今、松島淨先生を送別するにあたっても、同じやり方をとらせていただくことにしたい。

とはいえ、これまでの私の半生――せめて「まだ半分」であらんことを！――めいたものは、すでに昨年度の三回の連載でおよそのところを書いてしまった。これ以上、詳細を書き加える必要もない。そこで思案した結果、ささやかな読書案内（書籍以外のメディアもとりあげるが）のようなものを書いてみることにした。学生諸君から、どんな本を読むべきかを尋ねられることもたまにはあるので、必ずしも題名を裏切ることにはならないだろう。『社会学とはどのような学問か』への補遺としても読んでいただければと思う。

＊

今でもいるのかどうかは知らないが、ひと昔かふた昔前にはことあるごとに「学校の勉強なんか役に立たない」というクリシェを振り回すことで卑小な優越感を発露させるタイプの人たちが少なからずいた。もしかしたらそれはかれら自身の人生にとっては真実なのかもしれず、そうだとしたら私などから悪罵を投げつけられるいわれもないわけだが、それならそれで「自分の場合にはそうだった」という事情を明確にしてほしいものだ。

僕はといえば、学校という場のおかげで、永遠に大切だと思える言葉や書物に出逢うことが何度もあった。僕の両親は本を読むような人たちではなく、僕が育った家には本と言えるものはほぼ皆無だった。だから、もし学校とその図書室という制度がなく、僕が本を読んで考えたことを書いたときに肯定的な反応を返してくれた先生方がいなかったら、僕は数多くの貴重な知的財産を獲得する機会を奪われたままだったかもしれない。

ともあれ、小学校の図書室で出逢った本たちのことはすでに書いたので、ここでは教科書の話から始めよう。ただし紙数に限りがあるので、国語の教科書についてしか述べることができないのだが。

僕は、学年が上がった四月の最初の授業で配られた教科書をはじめて開く瞬間が大好きだった。このあいだまで慣れ親しんでいたものよりも一回り小さな活字がぎっしりページを埋め尽くしているのを見ると、いったいここに何が書いてあるのだろうという期待に胸がおどった（ワーズワースの「虹を見ると／私の胸はおどる」のように、と言っても大げさではない）。必ずしも名文や深い思想が書かれている必要はなかった。いかなる文章であれ、その秩序の波間に未だ見ぬものを見出し震撼する能力を、子供はもっているものだからだ。いつかの教科書の冒頭に載っていた、日本的な美をめぐる川端康成の文章はとりとめがなかったが、そこに描写されていたガラ

スのコップがきらきらと日差しを反射させるさまは強く印象に刻まれた。石川淳の文章を初めて読んだのも中学校の国語の教科書でだったと思う。それはアルプスの少女ハイジの続編を擬したパロディで、ハイジが突然輝きながら空に飛び上がるシーンは、まるで「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイヤモンズ」のように素敵だった。安岡章太郎の「サーカスの馬」という短編の続編を書きなさいという課題を出されたとき、僕はその主役である年老いた馬が実はロボットだったということにし、舞台もいきなり宇宙空間に移すという素っ頓狂な展開を試みて友達に笑われたが、それもその前に石川淳の作品を読んでいたからだ。

教科書には短い文章しか載せられないのが弱点で、長編の一部を切り出した文章などではやはり本来の面白さは伝わりにくい。だが詩歌の場合、そのことはあまり問題にならない。それもあってか、国語の教科書で読むことのできた詩歌にはきわめて優れたものが多かった。萩原朔太郎や八木重吉の詩にふれたのも教科書でだったし、芭蕉や「咳をしてもひとり」の尾崎放哉らの俳句、啄木や若山牧水や釈迢空の短歌、茨木のり子や石垣りんの詩に出逢ったことは大きい。かれらの研ぎ澄まされた言葉に面して、いつしか僕は自分の書く文章もその緊迫感に拮抗しうるものでなければならないと思うようになった。教科書に載っている作品などどうせ人畜無害でつまらぬものだろうというのは有害な偏見である。たとえば誰もがどこかで読まされたことのあるだろう石垣りんの「表札」（「自分の住むところには／自分で表札を出すにかぎる。」）や戦争体験をうたった「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」といった詩の、いかにも端正な民主主義的矜持の表明にひそむ怒りの禍々しさに気づかないのなら、どこに何が載っていようと何も読む必要はない。

もちろん、教科書はきっかけにすぎない。たとえば、教科書で石原吉郎の「世界がほろびる日に／かぜをひくな／ビールスに気をつけろ／ベランダに／ふとんを干しておけ／ガスの元栓を忘れるな／電気釜は／八時に仕掛けておけ」という詩が少しでも気に留まったら、同じ著者の（おそらく教科書には載りにくい）「ゆうやけぐるみのうた」も探し出して読んでほしい。そして、「おれ　ばかをいっぴき／ゆうやけの海へしずめてきた／なぎさで　おれ／なみだながしたともさ」という言葉たちをゆらめかせる残酷さの意味を、時間をかけて考えてみてほしい。やがてその先には、「私にとって人間と自由とは、ただシベリヤにしか存在しない（もっと正確には、シベリヤの強制収容所にしか存在しない）」（『望郷と海』あとがき）とか、「「人間」はつねに加害者のなかから生まれる」（「ペシミストの勇気について」）とかいった、凍てつく言葉たちが待っているだろう。けれどもそのとき彼此のあいだに横たわるはるかな距離を本物と見切るには慎重であるべきだ。君は、ナカマウチで何気なく回されてきた飲み物にクチをつけるのを本当は嫌だと感じつつ、その場の雰囲気（「フインキ」じゃないよ）を壊さないためにという愚劣な理由に負けて、それを飲んでしまったことがあるかもしれない。その瞬間、石原がついに語り得なかった〈スターリニズム〉が、すなわち独裁者の下での安穏たる暴力を絶えず欲望する〈民衆〉が、君自身の内部に顔をのぞかせたのである。言うまでもなく、民衆を殺すのは民衆以外ではあり得ない（そのことを隠すための言い訳として、国家だの社会だのといった観念は作られた）。ちなみに吉本隆明がこの平明な事柄を石原の文章から読みとれなかったことには呆然とするほかない（鮎川信夫との対談）。これは脳天気さに対する批判でさえなく、ただたんに戸惑わせる事実である。

かなり読書家の学生諸君でも、手にとるのは小説や新書が主で、詩を読む人は少ないような気がする。そうだとしたら、いますぐ無理をしてでも読めといいたい。面白かろうがつまらなかろうが、意味がわかろうがわかるまいが、とにかくある程度の数の詩や俳句や短歌を、しかも一つ一つをできるだけゆっくりと、読んでください（ニーチェの言う「遅く読む技術」の訓練）。それでも何を読めばよいかわからないという人のためには、いくつかの余計な手がかりをランダムに挙げておくことにする。

そいつは立ってた。そして突然現れた。
「オマエハナンダ？ココハドコダ？」吃驚（びっくり）したぜ。
風が吹いてた。荒野の感じがした。におい立つ
真夏の草の果てにある　オマエは正しく、ウチュウ。

（エレファントカシマシ「生命賛歌」）

痛む歯をおさへつつ、日が赤赤（あかあか）と、冬の靄（もや）の中にのぼるを見たり。

（石川啄木）

ドングリや千年前は歩いてた

（小学五年生男子の俳句。金子兜太・あらきみほ『小学生の俳句歳時記』蝸牛新社）

余は如何にして社会学教師となりしか

余は如何にして社会学教師となりしか

僕を連れ去ってくれないか　心の煙の輪をくぐり抜け／霧につつまれた時間の廃墟へ、呪われ、怯えた木々と／凍りついた葉を通り過ぎ、風の浜辺へ／狂った悲しみの捩じ曲がった手が届かないところまで／ダイヤモンドの空の下で踊ろう、片手を自由に振りながら／輝く海を背にして、砂の円形競技場で／記憶と運命は波間に深く沈め／今日のことは忘れよう、明日までは

（ボブ・ディラン「ミスター・タンブリン・マン」）

少女死するまで炎天の縄跳びのみづからの圓駆け抜けられぬ

（塚本邦雄）